(別紙2)

審査の結果の要旨　　氏名　近藤　智彦

本論文はストア派の運命論を研究対象とするもので、メインテーマは「運命論と自由意志は両立しうるか」という問題である。第Ⅰ部ではストア派の運命論とはどのようなものであるかが、第Ⅱ部ではそれに対する批判的議論が、さまざまな文献を引用して詳細に論じられる。

第Ⅰ部の第1章においてはストア派の「運命」概念について論じられ、それは「宇宙の諸事物の因果的な連関あるいは継起」のことであるということが示される。第2章においては、ストア派の運命論は因果的決定論であると論じられ、クリュシッポスによる運命論の3通りの証明が批判的に検討される。第3章においては、クリュシッポスが運命論と自由意志は両立するということを弁じた2つの議論が検討される。1つは、「怠惰な議論」と呼ばれる議論(病気が回復するもしくは回復しないことが運命によって決まっているのならば医者を呼ぶことは無駄である、という趣旨の議論)を反駁する議論であり、病気の回復は医者を呼ぶことと「連結したこと(copulatum)」あるいは「運命共同的なこと(confatale)」だと論じるものである。もう1つは円筒の類比による議論で、「円筒や円錐がそれぞれの形状に即した転がり方をするのと類比的に、人間も心の性向に即した行為をする」と論じて行為の原因を行為者の性向に帰する議論である。第4章では、ストア派の運命論の背景にある、「人間は宇宙の秩序の一齣である」という独特の世界観を裏づけるものとしての「運命愛」が検討される。

第Ⅱ部においてはアンチ・ストア派の議論が検討される。第5章においてはエピクロス派の「原子の逸れ」という考え方(すべての原子は等速で落下しているが、不定の時に不定の場所で進路を逸れることがあるという考え方)と自由意志との関係が検討される。第6章においては、アカデメイア派のカルネアデスの運命論批判の3つの議論(運命論と自由意志は両立しないという観点からの議論、心の自発的運動という観点からの議論、性向を行為の原因とする点を批判する議論)が検討される。第7章においては、アリストテレスの註釈家として有名なアレクサンドロスの運命論批判の議論が批判的に検討される。

最後に結の第8章において、現代において決定論と自由意志の問題が論じられる際の主要な観点となっている「選択可能性原理」(「その行為とは別のこともすることができた」という原理)という観点からストア派の考え方が検討される。

本論文は、一方で古代の(ギリシャ語・ラテン語の)文献を多数(筆者自身の翻訳によって)引用し、他方でそれらの文献に関する現代の欧米の最先端の研究をも批判的に検討している点で文献学的にきわめて綿密な研究である。ただ、引用に関しては、時に当該文脈で必要でない部分まで翻訳引用しているためにいささか冗長と感じられることもある。だが、これは重大な欠陥とは言えないだろう。

以上のような理由によって、本委員会は、本論文は博士(文学)の学位を授与するに値するという結論に達した。